

解放運動の可能性：部落差別を越えて

外国語学部英語学科 3 年

国武 匠(A0251122)

ゼミ論

この論文では、部落差別と解放運動について述べる。部落問題について調べてみようという興味を持った動機は、野中広務という政治家の半生を描いた「野中広務差別と権力」という本に出会い、その中に出てくる水平社宣言に衝撃を受けたことである。そしてそのような宣言を生んだ解放運動に何か大きな可能性を感じたのである。

まず、いつどのようにして部落差別が生まれたのかを見ていく。部落差別は一般的に江戸時代に政治的に作られたものだと言われていたが、その起源は中世までさかのぼることが出来る。この差別意識の根底には、“穢れ”という日本人の感覚が関係している。次に、戦前における部落民の状況と解放運動について述べる。また、日本で最初の人権宣言と言われている水平社宣言とその中で謳われている部落民の意識についても考察する。次に、今日でも残る戦後の部落差別の例を見ていく。主なものに結婚差別、就職差別、そして教育における差別があった。

そして、インドにおいてカースト制度の外に位置づけられたかつて不可触民と呼ばれたダリットの解放運動と、マーティンルーサーキング牧師が指導した 1960 年代の公民権運動を紹介、説明することで、それらの運動の方法、目的、成功、解放の課題と彼らが今日においてすべきこととどこへ向かっているのかを考えてみたい。

さらにアイデンティティの問題についても考察をする。これらの三つの解放運動において、マイノリティとしてのアイデンティティを確立することは大きな意味を持っていたのである。

また、差別問題を口にしなければいつの日にか差別はなくなるという考えに対して、人権的、歴史的視点から反駁する。そのような考えは現在存在する差別に苦しんでいる人を無視しており、また歴史的にも差別撤廃のために取られた方針として失敗しているのである。

以上の点を踏まえ、被差別者だけでなく、自分たちがマジョリティだと考えている人にも関係のある解放運動の達成しうることとは何かを最後に述べる。最終的に、違いを認めながら全ての人間は平等であり、だからこそ人間を尊敬することによって解放を達成するという水平社宣言の精神がこれからの時代に益々大きな意味を持つことになる結論付ける。

本論は英語で執筆した。

主要参考文献

- 小谷 汪之編 インドの不可触民 その歴史と現在 明石書店 1997
小松 克己 部落問題読本 明石書店 1986
住井 すゑ 橋のない川 第一部～第七部 新潮文庫 1992
灘本 昌久 ちびくろサンボよすこやかによみがえれ 径書房 1999
八木 晃介 部落差別論 批評社 1986
雪山慶正訳 マーティンルーサーキング 自由への大いなるあゆみ 岩波書店 1991

【Book】

- Buraku Kaiho Kenkyusho. *Discrimination against Buraku, Today*. 1986
Carson, Clayborne, And Shepard, Kris. *A call to Conscience*. Warner books. 2002
Joshi, Barbara, R. *Untouchable! Voices of the Dalit Liberation Movement*. Zed Books Ltd. 1986
Kitaguchi, Suehiro. *An Introduction to the Buraku Issue*. Japan Library. 1999

【Jounal】

- Alldritt, Leslie, D. *The Burakumin: The Complicity of Japanese Buddhism in Oppression and an Opportunity for Liberation*. Journal of Buddhist Ethics 7
2000